

「アーティストとともに、夢を掴みに歩いていけたら」

荻野征彌

デザイナー

OGINO DESIGN

〈オギノ・デザイン〉というプロジェクト名の下、ダニーデンを拠点に世界各地のアーティストと仕事に取り組んできたデザイナーの荻野征彌さん。オギノ・デザインのこれまでとこれから、デザイナーとしての仕事の流儀など、詳しく話を伺った。

Interview & Text: Yuto Tobikawa
Photo by Nicholas Sherlock



荻野征彌 /Ogino Seiya

京都府生まれ。中学3年まで滋賀県で過ごし、高校1年からニュージーランドへ。2006年、Lonewolf Designとして、ミュージシャンを対象にウェブデザインを開始。翌年にはEnsamvarg Designに名称を変更し、2013年、現在のOgino Designに。現在は音楽以外のアートの分野にも進出。国内だけでなく、欧州や日本などにもクライアントを抱える。

Ogino Design:
www.oginodesign.com

Photo by Nicholas Sherlock

5月。ニュージーランドの音楽業界は（ミュージック・マンス）（注）に沸いている。各所でコンサートが行われ、国内レベル各社は新作発表をこの時期に集中。ラジオ各局も国内音楽の比重を増やすこの時期は、国内のミュージシャンにとって、スポットライトを浴びる大チャンスだ。一方、ダニーデンに居を構えるデザイナーの荻野征彌（せいや）さんは、そんな彼らを陰から支える存在だ。地元のデザイン会社に勤務する傍ら、「オギノ・デザイン」というプロダクト名のもと、ミュージシャンのアルバムアートやウェブサイトのデザインを中心に手がけてきた。今回の取材のきっかけとなったシンガーソングライター、キアラン・マクミーケン（本誌2015年12月号に登場）もクライアントの一人だ。「セイヤと一緒に仕事ができるのは素晴らしいことだよ。僕のアイデア



Ciaran McMeeken (中央) とそのバンドメンバーと。「同じダニーデンから一緒に成長したという思いもあり、彼の作品がいい評価を受けたりすると、とてもポジティブな気分になります」

をととも独創的に表現してくれるし、なんとといっても一度口にしたことは必ずやってくれる人なんだ。キアラン・マクミーケンは荻野さんについてそう語っている。高校1年生の時にニュージーランドへやって来た荻野さん。デザイナーの世界と出会ったのは、その翌年のことだった。高校の授業でウェブデ

ザインに興味を持ち、大学ではコンピュータ・サイエンスを専攻。大学1年生だった2006年の冬には、（ローンウルフ・デザイン）というフリーランスのウェブデザイン・プロダクトを始めた。父親の影響でクラシック音楽とともに育った荻野さんが当時熱中していた音楽のジャンルはブラックメタルとデスメタル。当然のように、最初のクライアントはスウェーデン出身のメタル・ミュージシャン、クリスティアン・ラーソンだった。この頃から「小さいころから、うれしい時も悲しい時もそばにあって、いろいろと助けられた音楽をメインに活動してみよう」と思うようになったという。自身もピアノを嗜み、「アーティストの金銭面の辛さもわかっていますし、親戚にアート関係の方がいたので、アートへの真剣な思いというの小さい頃から見てきました」という荻野さん。以来、



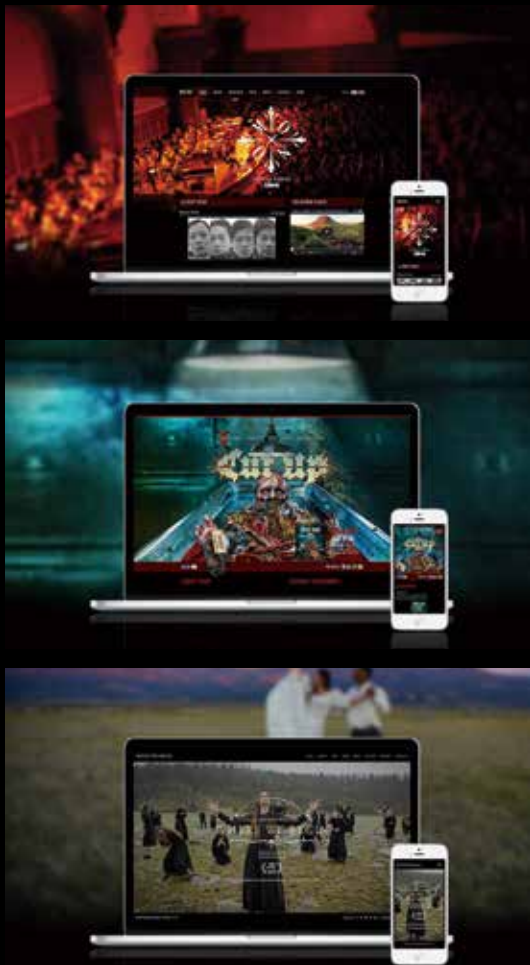
初クライアントのChristian Larssonと。「彼は今も仕事をしていますし、一緒に音楽まで作ったので、すべてがとても印象的です」

北欧のアーティストを中心に、ウェブサイト以外のデザインも手掛けるようになる。当時対象としていたのは、自身が興味を持ったアーティストのみ。それも値段はほぼ無料。クリスティアン・ラーソンの提案で、プロダクト名もスウェーデン語の（エンサンバグ・デザイン）に変更した。現在欧州にも複数のクライアントを抱えるオギノ・デザインのスタート地点だ。しかし、2013年から始まったニュージーランドのミュージシャンとの関係は、前途多難なものだった。始まりは、地元ダニーデン発の複数のバンドのためにデザインを始めたこと。だが、なかなか「自分のスタイルに合っている」と思えるアーティストに出会えず、クライアントだったバンドの解散が相次ぐ。「勝手なかもしれませんが、僕自身はアーティストのパートナーという存在ではないんです。一回きりの付き合いではなく、ともに成長し、夢を掴むために歩んでいけたらと思っ

年後、彼が所属する複数のバンドと仕事を始めた。キアラン・マクミーケンと仕事を始めたのもこの頃。デビュー作を発表したいと考えていた彼から、荻野さんに連絡があった。クラシックでオーガニックなサウンド、久しぶりのメタル以外のリクエスト。「やってみよう」と決心した。彼の活動に関するデザインは、現在に至るまですべて担当している。働き方の違いなどが原因となり、国内に抱えるクライアントの数は依然として多くない。だが、オギノ・デザインが今もニュージーランドのミュージシャンとつながりを持っているのは、彼ら二人の音楽に対する真誠さが伝わったからだったと荻野さんは振り返る。

一方で、荻野さんが一番印象に残っているとするのは、日本出身のインストゥルメンタル・ロック・バンド、MONOと2014年に取り組んだプロダクトだ。MONOのダブルアルバム発表のためのこのプロダクトで、荻野さんはデザインに加え、デジタル関係のマネジメントも初めて担当することとなった。関係各所とプロモーションやマーケティング活動を行い「とにかくそのチームワークに感動しました」。デザインを渡して終わるのではなく、プロダクトの最後までサポートを続ける。自身のやり方を変えるきっかけとなった。「MONOは2013年にウェリントンで初めてライブを見たときに涙が出るほどノスタルジックな気持ちになり、こちらからアプローチしたいです。同じ国出身の、こんなすごいインスピレーションのある方々と

※注：New Zealand Music Month: 毎年5月に行われる、国内音楽のプロモーション・キャンペーン。



荻野さんが手がけたウェブデザインの一例。上から：MONO (Japan) - Official Website 2013, Cut Up (Sweden) - Official Website 2015, Where We Begin (United States) - Official Film Website



荻野さんが手がけたカバーアートの一例。左上：Ciaran McMeeken (New Zealand) "Screaming Man", 左下：Glosom (Sweden) "Yearwalker", 右上：Svavelvinter (Sweden) "Nidingsverk", 右中：The Fu King (New Zealand) "Whatungarongaro Te Tangata Toitū Te Whenua", 右下：Bridge Burner (New Zealand) "Mantras of Self Loathing"

こんな形で関わる事ができるなんて、すごく光栄だと感じました」プロジェクト名を現在のオギノ・デザインに変更したのは2013年末。2010年の日本帰国時に目撃した東京発のハードコアバンド、エンヴィーに感銘を受け、後にMONOの音楽に心を動かされたことで、日本人として何かこの世に残したいという思いが強くなった。

そのオギノ・デザインは現在、転換期を迎えている。荻野さんは今年初旬、本業としていたデザイン会社での勤務をパートタイムに切り替え、オギノ・デザインを本業とする決断をした。決断の理由は「周囲の助けもあって、過去3年でオギノ・デザインに本業としての可能性が出てきたから」。また、今後は音楽以外のアートの世界にも積極的に進出する心づもりだ。これまでミュージシヤ



ファンでもあったスウェーデン発のメタルバンド、Vomitoryと。「彼らは2009年に大した経験もなかった僕を雇ってくれたので、今でもすごく感謝しています」



「バンドとして何もない状態でアメリカに飛び、苦勞をし、成功されたMONO。同じ日本人としてすごく尊敬しています」。MONOの日本チームと撮影。

ンを主なクライアントとして活動してきた荻野さんにとって、大きな方針転換である。

きっかけは2014年から翌年にかけて、先述のMONOが関わっていた短編映画『ウェア・ウィー・ビギン』のプロジェクトに参加したこと。監督の宮崎光代さんとプロデューサーのピーター・マエスレイの、映画に関わるすべての面への深い思

い入れを目的にしたりした。「アートは幅が広くて面白い、僕も音楽だけではなく、すべてのアートにかかわろう。ほかにもいろいろなることを体験できる」。そう思うようになった。「いずれオギノ・デザインだけで、アーティストの方々とともに、世界を渡り歩いたら——」

そう今後の目標を口にする荻野さんは、「ここまでやってこられたのは、

世界中の多くの方々の助けがあったからこそ」と、オギノ・デザインのこれまでを振り返ってくれた。

「デザインのインスピレーションとなるのは、やはりその方の作品なんです。音楽は体で感じ、アートはビジュアルの中に自分を溶け流す。自分で体験すればデザインは自然に出てきますし、そうして生まれたものは僕にとっても大切なものになるんです」

各アーティストと真剣に向き合い、最後の最後までサポートを続ける荻野さん。デザイナーとしてやりがいを感じるのは、「アーティストの方とアートや人生について一緒に語り合える瞬間」だという。

「アートは言葉で表現できないことや伝えられないことを伝えられる、生きていくための特別な力をくれる

ものだと思っています。僕なりに、人を救う力のある「アート」をサポートできればと思います、今も活動を続けています」。

「アートへの真剣な思い」を根底に、オギノ・デザインはこれからもアーティストたちを支えていく。



The Mark of Manに加え、現在はIn Dread ResponseやBridge Burnerにも所属するBen Readと。「彼と出会って、もっと国内の音楽に触れてもいいのかな、と思ったのを覚えています」